

アルツハイマー病は脳の糖尿病!?

認知症専門医 黒岩 明彦

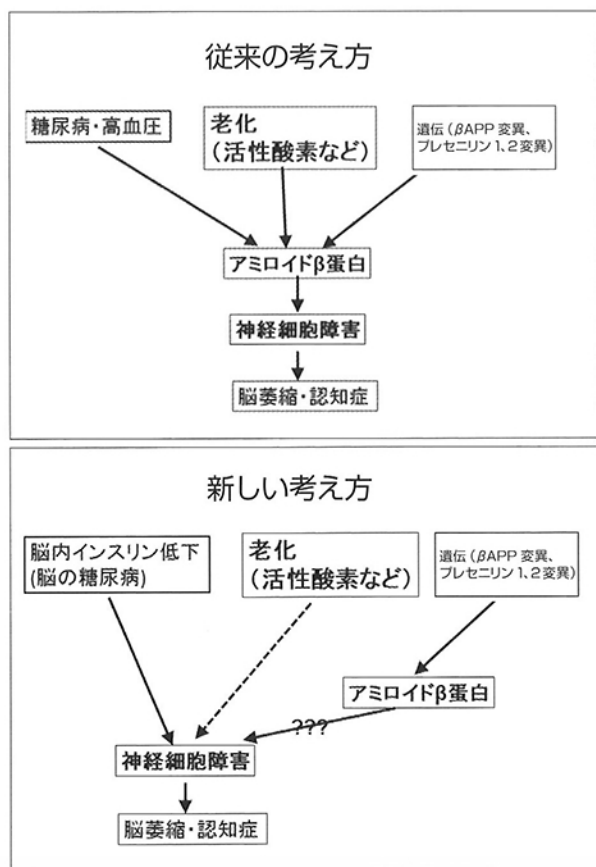


認知症の約7割を占めるアルツハイマー病は老化と共に増える疾患です。75歳以上の10%、80歳以上の25%、85歳以上の60%が認知症です。したがって、人口の高齢化とともにアルツハイマー病も増加の一途です。

ところが20世紀前半の時期には、高齢者の中でアルツハイマー病は稀だったのです。このことから、アルツハイマー病は必ずしも老化だけが原因ではないと考えられています。とくに、糖尿病を持つ人にアルツハイマー病が多いことから、糖尿病がアルツハイマー病の原因のひとつ(危険因子)と考えられています。

糖尿病は血糖値をコントロールするインスリンというホルモンが不足して起こる病気です。インスリンは膵臓で造られますが、糖尿病では、脳内に移行するインスリンが不足し、脳内中の低インスリン状態が生じています。すなわち全身の血液中の低インスリンだけでなく、脳においても低インスリン状態(インスリン抵抗性)が生じている。つまり脳の糖尿病状態というわけです。

アルツハイマー病は脳内において、アミロイドβ蛋白という異常たんぱく質が蓄積することにより、神経細胞が障害を受けて、脳が萎縮していく病気です。このことから、長年、アミロイドβ蛋白がアルツハイマー病の原因と考えられてきて、この治



療はこの脳内アミロイドβ蛋白を減らすこと、造らせないことを目標としてきました。

しかし、この30年間、世界中で試みられた治療研究はすべて失敗に終わりました。このため、いまやアルツハイマー病の原因は実はアミロイドβ蛋白ではないのではないかという疑問が湧いています。実は脳内で低インスリン状態が生じると、脳内のアミロイドβ蛋白が増加します。

すなわち、アミロイドβ蛋白はアルツハイマー病の「原因ではなく、結果に過ぎない」のかも知れないです。従ってアルツハイマー病の原因は実はアミロイドβ蛋白ではなく、低インスリン状態ではないかというのが最近の新しい仮説です。

さて、それではどうすれば脳の糖尿病ともいべきアルツハイマー病を予防治療することができるのでしょうか。まず、通常の糖尿病と同じ対策を取ります。食事・運動などの生活習慣の改善と糖尿病薬での治療です。しかし、アルツハイマー病は30年という長い経過を経て発症するので、既に脳萎縮が始まってからでは手後れです。そこで予防が重要で、これはやはり糖尿病の予防と同じです。食事・運動などの生活習慣の改善ですが、とりわけ運動が有効とされています。さらに、糖尿病でない人でもアルツハイマー病になることを考えると、糖尿病でなくとも脳内低インスリン状態が生じていることが想定されます。

これに対しては、脳内だけの低インスリン状態(インスリン抵抗性)を治す治療をおこないます。具体的には、インスリンを点鼻する、糖尿病薬アクトスの内服、糖尿病薬のGLP-1受容体刺激薬(ビクトーザ皮下注射)などでの治験が米国で行われています。(日本ではまだ行われていません)

前述したように、アルツハイマー病は30年という長期間を経過して発症してくる病気なので、予防治療も同じように長期間が必要で、脳の糖尿病としてのアルツハイマー病の予防治療が成功するかどうかはまだまだ長期間の観察をしなければわかりませんが、大きな期待が持てる方法だと考えています。